

退任（退職）挨拶



ごあいさつ

昭和大学 富士吉田教育部 教授 稲垣 昌博

昭和大学薬学部に入學して46年、大学院薬学研究科を修了し、米国の製薬企業に就職後約1年で昭和大学医学部第一薬理学教室助手として戻りました。助手の時に米国カンサス州立大医学部臨床薬理学教室に留学後、当時の教養部化学教室講師として富士吉田に赴任し、約30年が経ちました。赴任当時は講義や実習、研究に日々追われておりました。私自身が学生教育で常に心掛けていたことは、学生さんに理解されることに重点を置き、自分でイメージを描き、自分の言葉で説明できることです。さらにその結果、記憶として集積し知識が深まり、生命科学に対するモチベーションを惹起させることでもありました。その結果は如何なものか、富士吉田の教員として過ごした約30年の間に教え子たちが医療に貢献してくれていることで、少しでも貢献できたと思っていると、昭和大学の関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

私の専門分野は薬理学であり、30代半ばより有機化学領域にも真剣に取り組みました。口蓋粘膜の末梢神経支配の研究に始まり、高脂血症におけるフィッシュオイルの作用機序、ストレス負荷時の脳神経の変化、慢性透析患者における長期安定血液透析のための薬理学的研究等を行ってまいりました。特に血液透析に関連して30年以上も臨床研究を継続できたことは、ひとえに理事長・小口勝司先生、副学長・木内祐二先生のご理解とご協力の賜物と深く感謝いたしております。また、血液透析関連の研究で7名の博士論文に関与でき、2件の特許を取得できたことは自分の誇りと感じております。私を育ててくれた昭和大学に感謝するとともに、今後の富士吉田教育部の更なる発展をお祈り申し上げます。



私の思い出、昭和大学ありがとう

昭和大学 富士吉田教育部 教授 長谷川 真紀子

ふり返ってみると、昭和54年（1979年）に昭和大学に入職してからあつという間の43年間でした。富士吉田教育部の教員として富士吉田キャンパスで1年生の皆さんと、毎年たくさんの楽しい思い出を作ることができ、大変幸せに思っています。特に、指導担任として通称“コンパ”を担当してから30年になりますが、いつのころからか、“はせまき”という愛称で呼ばれるようになり、その呼び名は代々長谷川コンパの学生さんに伝わっていたようです。とてもうれしいです。ある日、旗の台校舎に向いたとき中庭を歩いていると、大きな声で「はせまき～はせまき～」と言いながら走ってくる、もと長谷川コンパの学生さんがいて、うれしいやら恥ずかしいやら、困ってしまった思い出があります。また、今年はコロナ禍ですが、キャンパス内で10月のある夜、気温5度という寒さの中、コンパの皆さんと震えながら線香花火を楽しんだことも良い思い出になりました。

子育てをしながら、教育や研究、学生指導、寮の担当など、何刀流かで毎日過ごすのは、時間をどうやり繰りしたら良いか、大変なことが多々ありましたが、とても充実した毎日、全速力で駆け抜けてきたような気がします。1日24時間では足りない日々でした。

このような私が、いろいろな面でご指導ご鞭撻をたまわった昭和大学の先生方および富士吉田キャンパスの皆さまに大変感謝申し上げます、お礼の言葉にかえさせていただきます。



昭和大学で過ごした47年

昭和大学 富士吉田教育部 教授 平井 康昭

早いもので、この3月をもって定年を迎えることになりました。1975年、昭和大学に入學した時には人生の半分以上を昭和大学で過ごそうとは思っていませんでした。

私の研究生生活の原点は、1年生で入部した薬用植物研究会にあります。夏合宿のおり、当時部長を務められていた庄司順三先生のお誘いで研究のお手伝いをするようになりました。大学院修了後、庄司先生のもとで助手として働き始めましたが、当時は自宅より研究室で寝泊まりした日の方が多い、まるで大学に住んでいるようでした。

1991年にはカナダにあるプリティッシュコロンビア大学に留学させていただき、様々な国の研究員と仕事をしました。当時の同僚とは今でも交流が続いており、時間ができたら会いに行くことを楽しみにしています。帰国後、富士吉田教育部を兼務し、1年生の指導担任を務めることになりました。最初は戸惑いもありましたが、学部を超えた学生の指導にやりがいを感じ、2013年に教育部に異動させていただきました。それ以来約9年、学内においては専門知識を活かしたサイエンス系選択科目を開講させていただきました。

学外においては地元の富士五湖薬剤師会に加えていただき、広報活動委員として公開講座や市政祭のイベントの企画・運営をしております。

私が富士吉田で楽しく過ごせたのは皆様のご支援、ご協力によるもので、心より感謝申し上げます。

長い間本当にありがとうございました。



白樺百合

昭和大学
富士吉田キャンパスだより
第41号 2021.12.23 発行

発行責任者 富士吉田教育部長 倉田知光
編集責任者 富士吉田教育部広報委員長 田中周一
〒403-0005 山梨県富士吉田市上吉田 4562
TEL 0555-22-4403



「富士吉田市上吉田から」富士吉田教育部 准教授 前田 昌子 撮影

ごあいさつ

昭和大学 富士吉田教育部 教授 山本 雅人

このたび教授に昇任いたしました。甚だ微力ではございますが、皆様の御期待に添うべく一層の努力をいたす所存でございますので、何卒倍旧の御指導御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

富士吉田校舎では、医療職を志す大学1年生が集まり、寮生活をともにして密度の濃い時間を過ごす中、多くの経験をして、多くを学んでいきます。この過程は、学生と教職員両方にとって、毎年新しい出会いの中からスタートする新鮮な経験です。こうした全寮制での初年次教育には、学生たちへの学修面のサポートだけでなく、寮生活の色々な問題を共有することも含まれます。そこでは、学生それぞれが異なる価値観を持ち寄り、ぶつかり合いながらも受け入れ合い、人間理解を深めていきます。このように若者が困難に対して立ち向かう、ダイナミックでエネルギーあふれる場では、様々な問題や困難は、ハードルというよりは、将来活躍する舞台へ上るための階段に近い印象です。このような学生たちの成長に教育業務を通じて立ち会えることが、富士吉田校舎で働く醍醐味だと感じます。実際、学生たちは、たとえ厳しい困難があっても、逞しく乗り越えていく頼もしい姿を、私の印象に残して、進級していきます。

引き続き、こういう場に居合わせて、何かしらの影響を与えたり受けたりしながら、富士吉田校舎で出会う若者たちの将来に貢献して参りたいと考えています。何卒宜しくお願い申し上げます。

富士吉田の寮生活を支える礎の一つとして

昭和大学 富士吉田教育部 教授 萩原 康夫

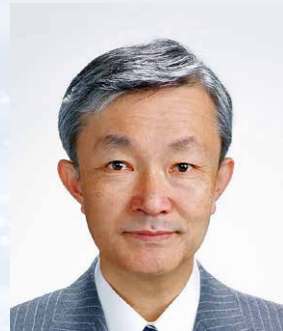
今年度の9月14日に教授を拝命いたしました。私が、富士吉田教育部（当時は教養部）の教員となったのは1999年の4月で、生物系の実習を担当する助手として着任しました。着任から23年という時間が過ぎましたが、その間には多くの学生たちとの出会いがありました。やんちゃな学生もいれば、物静かな学生もいました。時には生物好きな学生もおり、研究室によく遊びに来ては寮の門限である22時近くまで話をすることもありました。また、コンパ指導の学生たちとはBBQや小旅行などを通じて沢山の思い出を作ることができました。

退寮の時期になると、学生たちは「また吉田に来ます」といつつも、その後は旗の台、長津田の生活が中心となり、富士吉田に遊びに来られる学生はなかなかいません。しかし、国家試験が終わる2月から3月になると、富士吉田キャンパスを訪れる4年生や6年生を見かけることが多くなります。中には私に連絡をくれて、わざわざ会いにきてくれる学生もいます。吉田を訪れる理由を尋ねてみると、どの学生も富士吉田での寮生活に郷愁を感じて再訪したくなるようです。1年間に満たない富士吉田での寮生活ですが、ここでの生活はまさに昭和生としての魂の原点ということなのだと思います。

現在はコロナ禍により学生たちは制限された中で寮生活をおくっています。しかし、そんな窮屈な生活の中でも、多くの学生たちは寮生活を前向きに過ごそうとしています。私も微力ながらこれからも、学生にとって大切な時間である富士吉田での寮生活を支えるために、尽力する所存です。

広報誌名称について

全寮制を特徴とする富士吉田校舎学生寮は「白樺寮（男子寮）」「百合寮（女子寮）」の二寮からスタートしました。「赤松寮」「すみれ寮」を加えて四寮となった現在も、白樺・百合という名称は受け継がれています。この名を冠した「白樺・百合」という広報誌の名称には、過去・現在・未来の学生たちが日ごとに成長をとげて前進しつつも、常に初心を忘れず、伝統を受け継いでくれることへの願いが込められています。



医学部実習 将来を見据えて

医学部医学科 清水 優希
(私立昭和学院秀英高等学校出身)

初年次体験実習の9日間のうち、3日間は学部ごとの実習が行われました。

医学部の学部実習の1日目は医療面接と標準予防策実習が行われました。医療面接ではお会いしたことのない模擬患者さんを相手に、医師になりきって面接を行いました。模擬患者さんや先生からアドバイスをいただくことで、11月24日実施のOSCE(客観的臨床能力試験)に臨むうえで意識が高まりました。標準予防策実習では手指衛生の方法や個人防護具の着脱を学び、身の回りの衛生について知見を広げることができました。2日目は生化学の実験を行いました。試験管内の酵素反応を観察し、得られた結果をグラフ化することを通じて、酵素の基本的な性質を考察しました。実験を通して原理を把握することで、今後学習する医化学の理解に繋がりました。3日目は発達障害医療研究所と臨床薬理研究所についての講義がオンデマンドで行われました。発達障害医療研究所の講義では、脳の話を中心に発達障害や認知神経科学、MRI(磁気共鳴画像)、TMS(磁気刺激治療)について学び、臨床薬理研究所の講義では、そこで行われる新薬の治験について学びました。

今回の実習で様々な側面から医学につながる学びに触れることができました。将来医師になる展望を見据え、精進していこうと思います。



不自由体験 あなたにとって車椅子とは？

初年次体験実習の一環である不自由体験では、専用の装具を身につけることによって障がいをもつ人々の生活を体験しました。手足に重りを付け、耳栓をし、白内障・緑内障を体験できるゴーグルを装着すると、そこにはもう普段の感覚はありませんでした。歩くのも辛く、腰は曲がらず、文字も読めない。文字通りの不自由さを感じました。

そんな中で特に印象に残ったのは、車椅子体験です。杖をついて歩くのがやっとの状態でしたが、車椅子での移動はとても楽でした。普段、普通に歩ける私たちからするとただの動く椅子ですが、移動手段を持たない人にとっては魔法の椅子です。移動手段を確保するという意味だけでなく、社会活動への参加を促進することができます。

歯学部実習 コロナ禍での歯科病院見学実習

歯学部歯学科 坪井 悠莉
(筑波大学附属高等学校出身)



今年度の初年次体験実習は、コロナ禍の影響により若干のカリキュラム変更はあったものの、例年に準じた内容で実施されました。例年とはわずかに異なるものの、口腔内診査や歯牙の石膏模型作成、海外で活躍している歯科医師の先生方の貴重な経験談を伺うなど、三日間とは思えないほど充実した学修ができました。特に私自身が最も成長を感じた、昭和大学歯科病院での見学実習について述べたいと思います。

今回は顎顔面口腔外科、歯周病科、小児歯科を見学させていただきました。緊張して実習に臨みましたが、どの科の先生方も私たちをあたたく迎え、また真摯に対応してくださいました。最も印象に残ったのは、患者さんやそのご家族と歯科医師の先生方とが深い信頼関係を築いていたことです。そのため、患者さんが治療を嫌厭する様子が見られないことに感銘を受けました。実際の診療を見学し、私も将来は患者さんと信頼関係を築ける歯科医師になれるよう精進しようと心に刻みしました。

最後に、私たちに貴重な初年次体験実習の機会をご用意くださった昭和大学歯学部ならびに昭和大学歯科病院の皆様、そしてコロナ禍の中、初年次体験実習の機会をご準備くださった全ての皆様へ心より御礼申し上げます。

薬学部薬学科 小俣 豪
(神奈川県鎌倉高等学校出身)

不自由体験を通じて痛感したのはコミュニケーションの大切さです。介助者と十分なコミュニケーションが取れない時は恐怖を感じました。介助者と被介助者が密な意思疎通を図ることによって不自由は軽減でき、活動範囲は広がります。真の不自由とは、障がいをもつ人たちが孤立するのではないか。そのような認識を深める実習でした。



薬学部実習 小さな薬剤師

薬学部薬学科 大嶋 郁
(私立宇都宮短期大学附属高等学校出身)

三日間に渡る薬学部だけの実習は新型コロナウイルスの影響で学外に出ることは叶わず、学内のみでの活動となりました。残念に思う気持ちはありますが、とても有意義な時間だったと感じています。

薬学部では大きく分けて2つの実習を行いました。漢方薬に関する実習と薬局についての学習です。特に薬学部生として興奮を覚えたのは漢方薬をつくる実習でした。この実習で身につけた白衣は患者さんと接するときに着用するものです。まだ学生、しかも1年生ではありますが、この白衣を着れば私たちは病院を訪ねる患者ではなくなります。この実習は私たち学生が医薬品について理解するために行われたものでした。しかし実習机の上に並べられたものは医療従事者として患者さんを想って触れるべきものばかり。正しく完成するよう気を引き締めて教員の指示に従い、時に班のメンバーと話し合いました。

学外で学べないという歯がゆさはありましたが、それ以上に充実した、得るもの大きい三日間を過ごしました。ご尽力くださった先生方や関係者の皆様への感謝の意を忘れず、小さくも心に芽生えた医療従事者になるという覚悟を立派に育てようと心に決めた、そんな実習になりました。



高齢者インタビュー 「物語を聴かせてください」

「人にはそれぞれの物語があり、その物語に基づいた医療を行える医師を育てる。」昭和大学では優れた医療人を育成すべく、その目標への道筋のひとつとして数年前から地域と連携した実習を行っています。その一環として、本来であれば富士吉田市周辺の高齢者のご自宅を訪ね、その方の「人となり」をお聴きする実習が初年次体験実習期間中に行われる予定でした。しかし、今年は新型コロナウイルスの流行により、富士吉田地域を訪ねることができないため、代替の実習として夏休み中に身近な年配の方にインタビューを行うことになりました。そこで祖父にインタビューをお願いしたところ、快諾してくれました。

看護学科実習 未来への一步

保健医療学部看護学科 増岡 有紗
(神奈川県立港北高等学校出身)



「では、入れ歯を洗ってくださるので少し失礼しますね。」この言葉は学部実習で、一番心に残った言葉です。看護学科では学部実習2日目に病棟実習を行います。病棟実習とは病院へ赴き、今まで知識としてしか頭の中に入っていなかったものを実際に見て、感じて、看護について改めて考える実習です。

先に紹介した言葉、これは看取りの患者さんの看護援助を見学しているとき、面会に来た娘さんに向けての言葉です。タイミング的には文字通り、入れ歯を洗いに行くために中座する場面でした。

しかし、この言葉には言葉以上のものがとても多く含まれています。なぜなら、入れ歯を洗い終わっても看護師さんはすぐには病床に戻らなかったためです。すぐに戻らなかったのは看護師さんが私たちの疑問を先回りして教えてくれました。

「親子二人、水入らずで話す時間が必要だから、ギリギリまで他の業務をします。」

その言葉を聞いて私はハッとさせられ、このようにさりげなく気遣いのできる看護師になりたいと強く思いました。

今回一日のみながら、病院実習で得たものは、私のこれからの大きな変化を与えてくれました。この経験を胸にこれから研鑽を積んで、未来への一步を重ねていきたいと思っています。

歯学部歯学科 深澤 快晴
(私立市川高等学校出身)

インタビューでは祖父の地域との繋がりやこれまでの生活の歩みについて知ることができ、このインタビューを通して祖父がどのような人物なのか、祖父の「人となり」を私なりに理解することができました。その後の授業では、インタビューを通して理解した「人となり」を学生間で発表し合い、互いに質問することにより、それぞれの人物像の掘り下げを行いました。

一連の学習から、将来の医療現場で一人ひとりに適した医療の提案をするうえで不可欠となる能力の基礎を学ぶことができたと思っています。

理学療法学科実習 医療人として必要なものは何か

保健医療学部理学療法学科 日比生 康亮
(横浜市立戸塚高等学校出身)

初年次体験実習は11月1日から12日まで行われ、そのうちの二日間は4病院で実際に医療現場に立ち、理学療法士はどのように患者さんを治療していくのか、どういった形でチーム医療に参加していくのかなどを学ばせていただきました。

ここで一番に学んだことは、患者さんと向き合っていく中で仕事そのものを作業化せずに、笑顔で会話をしたり目を見て話したりすることを忘れてはいけないということです。治療に困難がともなう病気にかかっている患者さんや、早く社会復帰したくてもできない人たちがたくさんいます。そこで医療者が同じ立場になってそばにすることで、患者さんがどのような病気にかかっているようにも生きようとする気力が湧いてくるのだと実感しました。ゆえに私たちは、単にこれから必要になる知識や技術を取り入れていくだけでなく非言語的なものも含むコミュニケーション能力を高め、医療人としてのhospitalityを大切にしていきたいと思えます。

初めての実習でわからないことや不安なことがたくさんありましたが、私たちを快く受け入れてくださった患者さんや病院の先生方、昭和大学の先生方に感謝申し上げます。ありがとうございました。



BLS・救命救急法 いざという時に行動できるために

私たちは初年次体験実習の一環としてBLS(Basic Life Support)と救命救急法について学習しました。BLSでは成人、小児、乳児における胸骨圧迫、人工呼吸、AEDの使い方、異物除去法について学びました。胸骨圧迫は、正しい位置で強く速く絶え間なく圧迫し、また心臓に血液を戻すために十分な圧迫の解除を行う必要があります。最も有効な方法で胸骨圧迫を行うことで、人命救助の可能性を高めることができるのだと学びました。

救急法実習では、三角巾を折りたたんで作った包帯を用いて、応急手当の手法を学び、体の各部位において傷口をしっかりとふさぐことができるような包帯の巻き方を実践しました。また、傷病者が少しでも楽な姿勢を取れるようにするために、傷口が触れない場所に結び目

作業療法学科実習 作業療法士への一步

保健医療学部作業療法学科 鈴木 涼太
(栃木県立宇都宮北高等学校出身)



私たち作業療法学科の学生は、烏山病院と藤が丘リハビリテーション病院で初年次体験実習の学部実習を行いました。

病院実習に行く前には様々な不安がありました。特に、患者さんと初めて関わる機会だったため、患者さんとのように接したらよいか、実習生全員が不安を抱えていました。しかし、二つの病院で私たちが見学させていただいた患者さんはとてもやさしく、気軽に話しかけてくださったため不安はなくなり、大学の講義で学んだことを思い出しながら患者さんとコミュニケーションをとることができました。

また、実際に様々な道具を使用し、患者さんに作業療法を行っている場面を見学することができました。作業療法士は患者さんの様子を見ながらリハビリテーションを行っていて、無理をさせることがないよう予定とは異なるリハビリテーションに変更することもありました。院内の看護師や理学療法士との連携も行って、チーム医療を肌で感じるすることができました。

今回の実習を通して、大学の講義では学ぶことができない貴重な経験をすることができ、作業療法士としての一步を踏み出すことができました。

医学部医学科 柄澤 健太
(私立逗子開成高等学校出身)

を作る必要があります。緊急時であっても傷病者のことを最優先する観点で、包帯の巻き方ひとつにさえも表れていると感じました。

自分の目の前で誰かが倒れる。そんな時がもし来ても冷静かつ迅速に対応する、そのことを実践するための非常に有意義な実習でした。

